

日本語初中級レベルの読解問題における記述式解答の傾向

中嶋 めぐみ、木戸 恵子

(留学生別科)

Trend of descriptive answers in reading comprehension for students of Japanese language at beginning and intermediate levels

Megumi NAKASHIMA, Keiko KIDO

(International Division)

目白大学留学生別科日本語専修課程では、現在、初級から上級まで7クラスに分かれて日本語の集中授業が行われている。各々のクラス配属は選択式解答方法のプレイスメントテストによって決められる。しかし、学期中の日本語力の推移を観察すると、学生の中にはクラス配属が妥当であったかどうか、教師が疑問を呈するような学生もいる。そこで、学生の日本語能力を的確に把握するための一つの試みとして、記述式解答方法の読解クイズを行った。本実践では、読解クイズの設問の課題設定と解答傾向について、学期開始時と学期終了時の各学習者の解答を比較、分析した。その結果、直前の文脈指示の内容を問う問題などは正答率が高く、文章にタイトルをつけるなど、解答に必要な情報が広範囲にわたっている問題などでは正答率が低くなることが明らかになった。本稿では、これらの解答傾向について詳細に報告する。

キーワード：読解、プレイスメントテスト、記述式解答、課題設定、解答傾向

1. 実践の背景

目白大学留学生別科（以下、JALPという）では現在、初級前半・後半、中級前半・後半、上級・上級（交換留学生対象）、大学院進学クラスの7クラスが設置され、交換留学生、私費留学生（以下、学生という）が学期初めに行われる選択式解答方法のプレイスメントテストの結果により、各クラスに配属される。私費留学生の場合、そのほとんどが2学期から4学期JALPに在籍し、進学や就職を目指すのであるが、一学期目にどのクラスに配属されるかがその後の進路に大きく影響する。特に初級レベルの学生にとっては、進路準備時期にあたる2学期目以降に中級後半レベルあるいは上級レベルに達しているか否かは大きな問題となる。しかしながら、授

業開始1週間目には日本語能力が理由でクラス移動の可能性が生じる学生がいる。配属されたクラスよりも上のレベルのクラスに移動する学生もいるが、そのようなケースよりも下のレベルのクラスに移動するケースが多い。それらの学生の「理解力」は適切に測定され得ていたのか、また、学期中の日本語力の「伸び」を予想しながら最も適切なクラスへとクラス移動の是非を判断するのは、学生の母国での学歴および日本語学習歴とJALPでの数時間の授業における学習態度を見る限りでは非常に難しい。筆者らはたびたび現場で経験する逡巡から「理解力」と「伸びる」要素とは何かという疑問に至り、それを「類推力」、「情報総合力」、「既知情報の活用力」ではないかと仮定し、これは一体どんな能力なのか、また、それらを測ることはできるのかという観

点から、本実践を始めることにした。そこで、テキストの理解を前提とする読解問題において学生の記述式解答から物事をまとめたり、既知の情報を手掛かりに類推したりする能力を観察することとした。プレイスメントテストでは、文法・読解・聴解の3種類のテストを実施するが、本実践で読解テストを選んだ理由は、読解テストにおいて文法および語彙の両面での観察ができること、また、聴解テストでは、学生は問題文を聞いてすぐ解答しなければならないが、来日直後の初級・中級レベルの学生は日本語を聞き取ることに不慣れであり、解答が分析するレベルまで至らない恐れがあると懸念したからである。記述式解答方法による読解テスト（以下、読解クイズという）は、2015年度秋学期の試行を経て、2016年度春学期にJALPの初級・中級レベルの4クラスにおいて実施した。本実践報告において、その解答を観察し、傾向を分析した。

2. 目的

本実践の目的は、「類推力」、「情報総合力」、「既知情報の活用力」を測るための課題を設定した読解クイズにおいて、初級・中級レベルの学生の記述式による解答を分析し、これらの能力が内容理解にどのように影響を及ぼしているのか、その傾向を探るためである。また、学期開始時と日本語学習を重ねた学期終了時ではこれらの能力に何らかの変化が生じるのか、その推移も合わせて観察する。

3. 先行研究と本実践の方針

1. で述べたように、JALPのプレイスメントテストは、選択肢の中から設問の内容に合った答えを選ぶ解答方法であるが、山田ら（1980）は、高校生を対象とした実験から、選択式解答方法によるテストは選択肢自体が手がかり（Cueing）となり、学習者の高得点獲得に寄与するとしている。これでは、学習者が内容を理解した上で正答を導き出しているとは一概に言えない。日本語教育において、学習者が日本語の文章を読む際の内容理解は読みの深さに関係する。石井（2009）は、読解問題を解く際の学習者（日本語能力試験2級に合格し

た中国人2名）の過程を観察している。選択式の解答方法の場合、学習者は、まず、設問の問題指示文と選択肢を読み、その後、設問のテキスト該当箇所を探し、問題指示文と選択肢の文言とテキストの語句を照合していると述べている。解答に必要な情報を検索する範囲は、設問の該当箇所が含まれる段落が中心で、そこで解答が見つからないと前後の段落に読みを拡大したが、それ以上に検索範囲は広がらなかったとも述べている。つまり、問題指示文、選択肢の文言、テキストと3種類の文の中に共通して出現している語彙、言い換えれば意味が分からずとも共通の文字列を見出そうと試みている可能性があるのではないか。また、検索されるテキストの部分が、多くても3段落分であるという観察結果から、解答時に3段落以上の複数個所に存在する情報を総合する必要があるような設問には十分な解答ができないとも考えられるのではないか。また、八若（2001）は、韓国人日本語学習者に作文指導をする際、読解材料を与えると、読解能力が低い学習者群の方が、読解能力が高い学習者群よりも原文のままの表現をコピーして用いている場合が多いとしている。以上のような現象は、学習者の読みが表層レベルの理解に留まっており、内容理解が十分であるとは言えない。

また、テキストを深く理解するためには、未習の語彙や文法事項があっても、それを類推しながら読む能力が必要であると考えられるが、小森ら（2004）は、文章理解と課題で約8割以上の正答を導くためには96%の既知語率が必要であることを示唆している。しかし、実際には、ある日本語テキストと遭遇した場合、学習者が常に内容理解に十分な高い既知語率を有しているとは考えにくい。福本ら（2016）は、「読み手が書かれたものを理解することは、書き手の意図する内容をくみ取っていく作業だけではなく、書かれた文に積極的に働きかけ、その意味内容を再構築することである。読み手が持つ言語の知識に加え、事柄の背景知識や常識的知識を使いながら文脈を推測し、読み進めていくことが重要だ。」と述べている。そして、「この推測の手段こそが日本語学習者が未知の語彙に遭遇した際、読み飛ばしながらでも読み進められるようにする補償手段であ

る。」としている。

以上の先行研究を踏まえ、JALP の学生の日本語理解力を「類推力」、「情報総合力」、「既知情報の活用力」の3つの要素に絞り、記述式による学習者の解答を分析しようという本実践の方針に至った。

4. 読解クイズの実施方法

(1) 作成方針

初級レベル用、中級レベル用の二つのレベル向けに読解クイズを作成した。両レベルとも問題を2題ずつ用意した。各問題は800字から1000字程度のテキストとその内容を問う10問前後の設問を付した。初級レベルでは問題Ⅰが初級前半、問題Ⅱが初級後半、中級レベルでは問題Ⅲが中級前半、問題Ⅳが中級中盤の難易度とした。

(i) テキスト作成

テキストは書きおろしではなく、表1の通り、初級・中級読解教材より選択し、難易度および字数を調整するために加筆して作成した。

(ii) 設問作成

設問に関しては、本読解クイズの意図に合わせて記述式で解答させる方針で新たに作成した。設問の種類であるが、初級、中級ともに類推（語彙レベル、文脈レベル）、文脈の把握（スキミング）、情報の総合（スキヤニング）を問うものを設定した。設問数は、初級前半の問題Ⅰが10問、初級後半の問題Ⅱが11問、中級前半の問題Ⅲが9問、中級中盤の問題Ⅳが8問である。

表1 テキストを引用した教材と設問数

問題レベル	本文を引用した教材	設問数
問題Ⅰ 初級前半	牧野昭子他著『みんなの日本語初級Ⅱ 初級で読めるトピック25』	10
問題Ⅱ 初級後半	文化外国語専門学校編『楽しく読もうⅡ』	11
問題Ⅲ 中級前半	澤田幸子他著『日本語読み書きのたね』	9
問題Ⅳ 中級中盤	文化外国語専門学校編『文化中級Ⅰ』	8

(2) 実施方法

読解クイズは2016年春学期中に2回実施した。1

回目は学期開始時に（以下、1回目という）、2回目は終了時に（以下、2回目という）、それぞれ1時間程度で授業時間を利用して行った。そして、1回目、2回目ともに全く同じ問題を使用した。これは、1回目、2回目の学生の得点率の差を比較し、また、記述式解答の内容などの変化を観察するためである。なお、1回目の実施後には答え合わせやフィードバックは一切していない。読解クイズの受験者は表2の通りである。2016年度春学期にJALPに在籍した学生のうち、初級レベルの学生19名、中級レベルの学生24名が受験した。初級レベルの学生には問題ⅠおよびⅡ、中級レベルの学生には問題ⅢおよびⅣを受験してもらった。

表2 読解クイズ対象者

級	使用問題	在籍クラス	人数	出身国・地域内訳
初級	I	N5	7	中国4、韓国3
	II	N4	12	中国4、韓国4、タイ1、ドイツ1、スペイン1、イギリス1
中級	III	N3	12	中国4、韓国5、フランス3
	IV	N2	12	中国4、韓国2、台湾1、タイ1、モンゴル1、ベトナム1、アメリカ1、イギリス1

(3) 解答の検討方法

本実践の趣旨に基づき、内容理解に観察の焦点を当てた。解答中における文法ミスは、解答の意図が判明できた場合は減点しなかった。そして、1問2点の配点とし、期待される情報がすべて盛り込まれている解答の場合は2点、一部しか盛り込まれていない解答の場合は1点、誤答の場合は0点とした。今回は設問ごとに結果の分析を行った。まず、1回目と2回目の読解クイズの問題（Ⅰ～Ⅳ）について、各設問の得点率を出した。得点率の算出方法は以下のとおりである。

- ① 2点×学生数を満点とする（以下、満点という）。
- ② 学生全員分の得点を足したものを得点とする（以下、得点という）。
- ③ 得点を満点で割った。

さらに、設問ごとに1回目と2回目の得点を足し、2回分の設問の満点で割り、全体の得点率を出した（表3～表6中の得点率である）。また、2回目の得

点率から1回目の得点率を引いたものを1回目2回目得点率差として表に入れた。

5. 読解クイズの結果と考察

本稿では読解クイズの結果のうち、各設問の得点率、1回目2回目得点率差を取り上げて、分析・考察を行った。

(1) 得点率の結果と考察

まず、得点率が高い設問と低い設問を観察した。

(i) 初級問題得点率順の結果

初級問題ⅠとⅡの設問を得点率の高い順にしたものを以下表3、表4に示す。

表3 初級問題Ⅰ 得点率および1・2回目得点率の差

得点率順	設定課題	内 容	得点率	1回目得点率	2回目得点率	1回目2回目得点率差	1・2得点率の差順
1	情報総合	指示詞「それ」の内容	96.1	97.4	94.7	-2.7	10
2	情報総合	指示詞「その日」の特定	65.8	31.6	100.0	68.4	1
3	情報総合	「体にいい」とは	64.5	44.7	84.2	39.5	3
4	類推（語）	「主婦」意味	61.8	50.0	73.7	23.7	5
4	類推（文脈）	文完成 文の後半をつくる	61.8	34.2	89.5	55.3	2
6	情報総合	広範囲の情報を総合する	57.9	55.3	60.5	5.2	8
7	情報総合	広範囲の情報を総合する	43.4	36.8	50.0	13.2	6
8	文脈の把握	接続詞を補充する	39.5	36.8	42.1	5.3	7
9	文脈の把握	タイトルをつける	36.8	36.8	36.8	0.0	9
10	類推（語）	「外食」の意味	27.6	10.5	44.7	34.2	4

表4 初級問題Ⅱ 得点率および1・2回目得点率の差

得点率順	設定課題	内 容	得点率	1回目得点率	2回目得点率	1回目2回目得点率差	1・2得点率の差順
1	情報総合	狭い範囲の情報を総合する	61.8	47.4	76.3	28.9	4
2	類推（語）	「診察」の意味	50.0	42.1	57.9	15.8	8
3	情報総合	広範囲の情報を総合する	46.1	23.7	68.4	44.7	2
4	類推（文）	「遠くの親戚より近くの他人」の意味	44.7	34.2	55.3	21.1	7
5	類推（文）	文完成 文の後半をつくる	35.5	21.1	50.0	28.9	4
5	情報総合	指示詞「こんなとき」の内容	35.5	23.7	47.4	23.7	6
7	文脈の把握	接続詞「それで」の補充	34.2	10.5	57.9	47.4	1
7	類推（句）	「都会の人は冷たい」の意味	34.2	13.2	55.3	42.1	3
9	情報総合	広範囲の情報を総合する	18.4	15.8	21.1	5.3	9
9	類推（語）	「心細い」の意味	18.4	18.4	18.4	0.0	10

初級問題Ⅰの得点率の高い設問3問はいずれも情報総合の問題であった。得点率1位と2位は96.1%と65.8%で指示詞の内容を問うものであった。3位も情報総合の問題ではあるが、段落内の情報を総合して答える設問で、64.5%であった。初級問題Ⅱは

初級後半程度のレベルで難易度が上がったため、問題Ⅰに比べ、全体的に得点率が低かった。得点率の高い設問3問は次のとおりである。1位は狭い範囲の情報総合で、61.8%、2位は語の類推で50.0%、3位は広範囲の情報総合で46.1%であった。また、得点率の低い設問3問は、初級問題Ⅰでは、1位が語の類推で27.6%であった。2位は文脈の把握（タイトルをつける）、3位は文脈の把握（接続詞の補充）で、それぞれ36.8%、39.5%であった。初級問題Ⅱでは、語の類推で18.4%、広範囲の情報総合で18.4%、句の類推で34.2%であった。

(ii) 中級問題得点率順の結果

中級問題ⅢとⅣの設問を得点率の高い順にしたものを以下表5、表6に示す。

表5 中級問題Ⅲ 得点率および1・2回目得点率の差

得点率順	設定課題	内 容	得点率	1回目得点率	2回目得点率	1回目2回目得点率差	1・2得点率の差順
1	文脈の把握	接続詞「しかし/でも」補充	83.3	75.0	91.7	16.7	2
2	情報総合	段落内の情報を総合する	73.8	63.3	84.2	20.9	1
3	情報総合	広範囲の情報を総合する	71.9	70.8	72.9	2.1	6
4	類推（語）	「変化」の意味	62.5	54.2	70.8	16.6	3
4	類推（文）	文完成 文の後半をつくる	62.5	64.6	60.4	-4.2	9
6	類推（語）	「生の音楽」の意味	58.3	54.2	62.5	8.3	5
7	類推（語）	「送金」の意味	49.0	41.7	56.3	14.6	4
7	情報総合	広範囲の情報を総合する	49.0	47.9	50.0	2.1	6
9	文脈の把握	タイトルをつける	32.3	31.3	33.3	2.0	8

表6 中級問題Ⅳ 得点率および1・2回目得点率の差

得点率順	設定課題	内 容	得点率	1回目得点率	2回目得点率	1回目2回目得点率差	1・2得点率の差順
1	文脈の把握	タイトルをつける	68.8	64.6	72.9	8.3	7
2	類推（文）	「机の上では勉強できない」の意味	61.5	54.2	68.8	14.6	5
3	情報総合	指示詞「この結果」の内容	56.3	52.1	60.4	8.3	7
4	類推（文）	文完成 文の後半をつくる	53.1	47.9	58.3	10.4	6
5	類推（語）	「平等」の意味	50.0	37.5	62.5	25.0	1
5	情報総合	広範囲の情報を総合する	50.0	41.7	58.3	16.6	4
7	類推（語）	「思いやる」の意味	25.0	12.5	37.5	25.0	1
7	文脈の把握	接続詞「つまり/例えば」の補充	25.0	12.5	37.5	25.0	1

中級問題Ⅲの得点率の高い設問3問は、1位文脈の把握（接続詞の補充）で83.3%、2位段落内の情報総合で73.8%、3位広範囲の情報総合で71.9%であった。中級問題Ⅳは中級中盤程度の難易度の問題であったため、得点率は問題Ⅲに比べ、全体に低かった。得点率の高い設問3問は、中級問題Ⅳでは文脈の把握（タイトルをつける）68.8%、文の類推61.5%、情報総合（指示詞の内容）56.3%であっ

た。また、得点率の低い設問3問は、中級問題Ⅲでは、文脈の把握（タイトルをつける）で32.3%、広範囲の情報総合で49.0%、語の類推で49.0%であった。中級問題Ⅳでは、文脈の把握（接続詞補充）25.0%、語の類推25.0%、広範囲の情報総合50.0%であった。

(iii) 読解クイズ得点率順からみる設問の特徴

得点率が高かった設問には、三つの傾向が見られた。第一に狭い範囲に必要な情報がある設問である。例えば、初級問題Ⅰで最も得点率の高かった情報総合の設問は「きょうはきのうの晩ごはんのすき焼きがありましたから、それを食べました。」という文で「それ」という指示詞の内容を問う問題であった。このように問題部分の直前あるいは当該部分の前後、狭い範囲に、解答へとつながる明示的な情報がある設問は、必要な情報を抜き出し、解答が得やすいと考えられる。

第二に上述のすきやきの設問のように、解答が語の単位、句の単位、あるいは短い文に集約される問題である。ただし、本実践でのクイズ実施の目的はあくまでも学生の内容理解に主眼を置いており、文法的な正確さは厳しくは問わなかった（以下の考察においても同様である）。

第三に既知の情報を生かしやすい設問である。例えば、初級問題Ⅱの「^{あし}足が^{いた}痛くて、^た立つことも^{ある}歩くこともできなかったの、^{きゅうきゅうしや}救急車で^{びょういん}病院に運ばれた。すぐにお^{いしや}医者さんがしんさつしてくださった。」という文で「しんさつ」という未知語を類推する設問であるが、「痛い」「病院」「医者」など文中の情報を手掛かりに、病院で医師が行うことという学習者自身の既知の情報を生かすことによって、正答が得やすい設問であった。

一方で、得点率の低かった設問の特徴は、以下三つの点である。第一にタイトルをつけたり、空欄に接続詞を入れたりする設問のような、比較的広い範囲から情報を得なければならない問題である。中級問題Ⅲを例にとると、得点率最下位であった文脈把握の設問は文のタイトルをつける問題であった。文章全体を読み、文の流れを把握した上で文脈を上位概念語に置き換え、タイトルとしなければならず、簡単には正答が得られない問題である。

第二に上述のすきやきの設問のように単語1語で

解答になるものではなく、文としてまとめなければならない問題である。例えば、中級問題Ⅳで得点率の低かった情報総合の設問は敬語に対する筆者の意見をまとめるものである。分散したいくつかの情報を過不足なく総合しなければならない問題であり、難易度が高かった。

第三に前後の文に明示的な情報が少ない設問である。例えば、中級問題Ⅳで得点率の低かった問題は「^{けいご}高校生の多くは^{にんげんかんけい}敬語を人間関係をうまく^{ちようせい}調整するものだから、これからの世の中にも必要であると思っており、相手を思いやる心から生まれるものだととらえている。」という文で「思いやる」という語の類推が要求される設問である。しかし、問題部分の前後に相手を気遣うことにつながる明示的な情報が少ない中で類推しなければならず、正答を導くのが難しい問題であった。

今回得られた結果にはいくつかの例外も見られた。それは、文脈把握の問題として設定した、接続詞補充問題と情報総合問題として設定したタイトルをつける問題である。初級問題Ⅰ、Ⅱでは比較的広い範囲を読み文脈を把握して接続詞を補うものは、それぞれ39.5%、34.2%と得点率が低かったが、中級問題Ⅲでは接続詞「しかし」を補う設問が83.3%と、最も得点率の高いものになっている。これは、日本語学習がある程度進んだ段階の中級レベルの学生にとって、「しかし」のように、前後で文の流れが大きく変わるものは比較的文脈が把握しやすいためであると思われる。本実践の他の接続詞を問う設問の解答である「つまり」「例えば」のような接続詞を補充する問題においては得点率が低く、このことから「しかし」という接続詞は補充しやすいものであることがわかる。また、タイトルをつける問題も同様に文章全体の情報を総合しなければならず、初級問題Ⅰで36.8%、中級問題Ⅲでは32.3%と得点率の低い問題であったが、中級問題Ⅳでは最も得点率が高い問題という結果であった。中級問題Ⅳは敬語の必要性について書かれた文章であるが、「敬語」というキーワードが繰り返し文中に現れ、それをそのまま上位概念語としてタイトルにしても、得点に結びつくものであったためである。

(2) 読解クイズ1回目と2回目の得点率の差

4. で述べたように、読解クイズは、学期開始時に1回目、終了時に2回目を実施し、その得点率を比較し、差を観察した。

(i) 初級問題1回目と2回目の得点率の変化

初級問題ⅠとⅡの1回目と2回目の得点率の差を表3、表4でみる。表の右端の列が得点率差の順位である。初級問題Ⅰの2回目で得点率が上がった3問は、1位が情報総合（指示詞の内容）、2位が語の類推、3位が段落内の情報総合で、それぞれ、68.4%、55.3%、39.5%上昇した。初級問題Ⅱの2回目で得点率が上がった3問は、1位が文脈の把握（接続詞の補充）、2位が広範囲の情報総合、3位が句の類推で、それぞれ、47.4%、44.7%、42.1%上昇した。また、得点率の変化が少なかった4問は、初級問題Ⅰでは情報総合（指示詞の内容）で2.7%減少し、文脈の把握（タイトルをつける）は変化が見られず、文脈の把握（接続詞補充）は5.3%、広範囲の情報総合は5.2%の上昇に留まった。初級問題Ⅱでは語の類推は変化が見られず、広範囲の情報総合は5.3%、語の類推は15.8%の上昇であった。

(ii) 中級問題1回目と2回目の得点率の変化

初級同様に、表5、表6から中級問題における1回目と2回目の得点率の変化を確認する。中級問題Ⅲの2回目のクイズで得点率が上がった3問は、1位が段落内の情報総合、2位が文脈の把握（接続詞補充）、3位が語の類推で、それぞれ、20.9%、16.7%、16.6%上昇した。中級問題Ⅳの2回目のクイズで得点率が上がった3問は、語の類推、語の類推、文脈の把握（接続詞の補充）で、いずれも25.0%の上昇であった。一方、上昇率の低い項目は中級問題Ⅲでは、文の類推が4.2%減少し、文脈の把握（タイトルをつける）は2.0%、広範囲の情報総合2.1%の上昇に留まった。中級問題Ⅳでは文脈の把握（タイトルをつける）、情報総合（指示詞の内容）、文の類推で、得点率の差はそれぞれ、8.3%、8.3%、10.4%であった。

(iii) 読解クイズ1回目と2回目の得点率の変化からみられる設問の特徴

1回目と2回目の得点率の差が大きかった設問は、次のような傾向がみられた。第一に比較的狭い範囲に明示的に情報が示されているものである。最も差

が大きかった初級問題Ⅰの情報総合（指示詞の内容）の問題は「今、1週間に1回ダンスに行きますから、その日は友達と教室の近くのレストランで食べます。」という文で、「その日」を特定する問題であるが、直前にかつ、明示的に必要な情報がある。また、同じく中級問題Ⅲの語の類推は、「春は桜の花がきれいだし、夏は神社でお祭りがあるし、日本はお金を使わないで、花や踊りを見たり、音楽を聞いたりすることができます。マニラは一年中20度から35度ぐらいなので、日本の季節のへんかはおもしろいです。」という文で、「へんか」の意味を問う設問であった。学習が進み、段落内にある「春」「夏」「季節」などの語をヒントとして正答が導けるようになったと考えられる。

第二に初級のクラスで使用している教科書（『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』）において学習の進捗とともに知識を獲得した内容である。初級問題Ⅱの文脈の把握問題（接続詞補充）がそれに当たる。この問題は接続詞「それで」の補充問題であるが、「それで」は『みんなの日本語初級Ⅱ』の学習項目であり、2回目ころには学生が既習の知識として用いることができたものと考えられる。

一方、得点率の差が少なかった問題には以下のような傾向がみられた。第一に広い範囲から情報を総合しなければならない問題である。中級問題Ⅲの情報総合問題は「外国で必要なものはお金ではなくて友達である」という文中の人物の言葉の理由を問う設問である。この設問では正答の必要情報を具体例からさかのぼって広い範囲から抽出しなければならず、学習が進んでも正答率が大きくは上昇しなかった。

第二に問題部分の前後に明示的な情報が少ない設問である。例えば、初級問題Ⅱの語の類推は「先輩や友達も心配して時々見に来てくれるし、夕食を作って持ってきてくれることもある。母は、週末にうちに来てくれるが、毎日大変なことがある。特に夜になるととても心細くなる。」という文で、「心細い」の意味を類推する設問である。けがをした文中の人物の生活の不自由さについては明示的に言及されているが、心情につながる明示的なヒントがなく、得点率に変化はみられなかった。

第三にもともと得点率が高い設問である。1回目

から得点が高いために2回目との差がみられなかった。これには、初級問題Ⅰの「すきやき」のような設問がある。

以上、読解クイズ得点率の結果、読解クイズ1回目と2回目の得点率の差に関する考察から、得点率の高い問題は、①狭い範囲に必要な情報がある、②解答が語や句、短文に集約される、③既知の情報が生かしやすい設問であること、得点率の低い設問は、①広い範囲から情報を総合しなければならない、②分散している情報を過不足なく総合しなければならない、③明示的なヒントが少ない設問であることがわかった。また、得点率が伸びた設問は、①狭い範囲に情報が明示的に示されている、②学習の進捗によって既習事項となった設問であった。さらに、得点率が伸びなかったものは、①広い範囲から情報を総合しなければならない、②情報が明示的に示されていない、③1回目から得点率の高い設問であることが明らかになった。

おわりに

本実践において、初級・中級レベルの学生の読解問題における記述式解答から、理解を深めるために重要な要素として「類推力」、「情報総合力」、「既知情報の活用力」について観察してきた。その結果、これらの三つの要素に関して次のような共通した傾向が観察できた。解答に必要な情報が狭い範囲に出現したり、明示的な場合は学習者の内容理解の正確さが増すこと、また、反対に情報が段落を超えて広い範囲に分散している場合、設問文の日本語と問題のテキストに共通した語彙が容易に見出せない場合は正答を導くことが困難になることである。以上のことから、新学期の開始時にこれらの観点から記述式解答の読解クイズを実施することにより、学生の、特に読解分野における日本語力が設問文と問題文の語彙の一致を頼りにするような表層的な理解の過程にあるのか、または内容理解を深めるような過程にあるのか、ある程度は推測できることが示唆された。また、学期中の読解授業においては、学生の読み方が内容理解をより意識したものに変容するように、

本実践で観察された正答がうまく導けない設問を意識した練習問題を積極的に取り入れることの有効性が示唆された。すなわち、広範囲に情報が分散されている状況や、情報が明示的でない状況を取り入れて学習をすすめることが必要であるということである。これらの結果を踏まえた指導や教材の整備を今後の課題として稿を閉じたい。

《参考文献》

- 石井怜子 (2009) 「解答時に本文テキストを参照しない読解授業の試み－表層的な理解から内容理解を目指した読みに転換するために－」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』2009年度日本語教育実践研究フォーラム
- 小森和子・三國純子・近藤安月子 (2004) 「文章理解を促進する語彙知識の量的側面－既知語率の閾値探索の試み－」『日本語教育』120, 日本語教育学会, pp.83-92
- 澤田幸子・武田みゆき・福家枝里・三輪香織 (2015) 『日本語読み書きのたね』スリーエーネットワーク
- 八若壽美子 (2001) 「韓国人日本語学習者の作文における読解材料からの情報資料－読解能力との関連から－」『世界の日本語教育』11, 2001年6月, 国際交流基金, pp.103-114
- 福本和佳子・印道緑 (2016) 「文脈力をつける読解教育－推測力の養成を中心に－」『北九州市立大学国際論集』(14) 2016年3月, 北九州市立大学 国際教育交流センター, pp.157-170
- 文化外国語専門学校編 (1996) 『楽しく読もうⅡ』にほんごの凡人社
- 文化外国語専門学校編 (1997) 『文化中級Ⅰ』にほんごの凡人社
- 牧野昭子・澤田幸子・重川明美・田中よね・水野マリ子著 (2001) 『みんなの日本語初級Ⅱ 初級で読めるトピック 25』スリーエーネットワーク
- 山田憲一郎・竹友一成 (1980) 「記述式テストと選択式テストの得点差に関する研究」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』3, pp.251-255
- (受付日:2016年10月31日、受理日2016年12月9日)